



TITLE:

<大會抄録>張謇と東南互保

AUTHOR(S):

藤岡, 喜久男

CITATION:

藤岡, 喜久男. <大會抄録>張謇と東南互保. 東洋史研究 1982, 41(3): 603-604

ISSUE DATE:

1982-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153863>

RIGHT:

ハンバリー派の政治論の變らない部分と變化した部分を、十一世紀のイブン・ファッラーと十四世紀のイブン・タイミーヤという、同派の法學者の中ではこの分野で特に顯著な業績を残した二人の人物の政治論を比較することを通じて、いく分なりとも明らかにしてみたい。

イブン・ファッラーについてはその著 *Abkam al-sulṭāna* (統治の諸原理) を、イブン・タイミーヤの場合は *al-Siyāsa al-shar'iya* (イスラーム法の政治) という本を取りあげて、その内容の重要なポイントを比較検討していくことにする。

中國紡績業の「黄金時代」

森 時彦

一九一九年から二〇年にかけて、中國紡績業は綿糸一捆當り五〇兩という未曾有の高利潤にうろつた。その結果、紡績業への投資はブームをよび、僅々四、五年の間に紡錘数は三倍近い激増をみた。中國民族工業の「黄金時代」をきづく原動力となったこの紡績業勃興の原因については、従來の研究では多く、第一次世界大戦の影響による根強い國內需要の擴大と、それに續く國內市場の「紗貴花賤（製品高の原料安）」という、いわば現象面だけの説明が當てられてきた。

本報告では、當時の中國紡績業の發展段階を考慮にいれつつ、綿糸價格と棉花價格（とりわけ後者に重點を置いて）の國際比較をこ

ころみることによって、紡績業にとって理想的な「紗貴花賤」という環境が、何故にはかならずこの時期に中國市場にもたらされたのかという問題を解明したい。この分析は、中國市場の構造的特質を通じて、中國紡績業の「黄金時代」なるものの實態をより鮮明にすることを可能にすると同時に、第一次世界大戦後の東アジアにおける綿紡績工業の展開過程の中で、中國紡績業のおかれていた位置とそれによって規定された限界をも、間接的にはあるが明らかにできるのではないかと思う。

張謇と東南互保

藤 岡 喜久男

張謇の東南互保への關與は、C. タン、S. チュ、李國祁氏が夫々既に觸れられている處であるが、ここではそれを、張謇の「柳西草堂日記」同「年譜」、彼と關係の深かった劉厚生（劉垣）の「張謇傳記」惜陰（趙鳳昌）の「庚子拳禍東南互保之紀實」盛宣懷・劉坤一・張之洞・李鴻章の電稿、及び日英の外交文書等々によって、より明確にし、張謇のその後の立憲運動・辛亥革命への關與の性格を考察する手掛りとしたい。

内容は、(一)タン・チュ・李三氏によりつつ同約款が劉・張・李三總督の東南の平和維持政策と盛ら上海官紳の約款締結提議・協力の結果であることの紹介、(二)その上海官紳の一人とされる張謇（進士、實業家）が、舊知の沈瑜慶（舉人、文肅公の息）等々と共に、

劉・張兩總督と趙・何嗣焜・盛（貫辦、南洋公學關係者、三人とも武進縣出身）との兩者を媒介したこと、その際その重要な一環をなす劉總督説得を張馨が南京・上海滯在中に行なったことを、前掲の諸資料から實證、(三)ところが、張馨の日記にその説得の記述を缺く、實は右の南京・上海滯在中その二日だけ記述のない五月二七・二八日にそれがなされたこと、前掲の諸資料から推論（關與しつつ同様その記述を残していない例あり、陳三立・沈曾植・湯壽潛等）、彼の説得の内容を検討し、當時の東南互保觀、その他一般的政治情況を考察すること、とする。

呂坤の鄉村對策と華北農村

谷口規矩雄

呂坤（一五三六—一六一八）が明末、萬曆期の特徴ある思想家であることは既によく知られたところであり、當時の農村問題についても、しばしば對策を發案し、官僚として、また退職後は郷紳として、自身それらの問題を解決すべく盡力したことも指摘されている。

しかし彼の思想體系そのものを別にして、彼の鄉村改革策のみに限つても、なおいまだ十分に検討されてはいないと思う。私は、萬曆後半期の華北農村の危機的狀況に對して、呂坤が提出した改革案——それは租税・徭役問題が中心的課題となっているのであるが、なかでも土地集中の進行にともなう中小農民の税役負擔の不公平の擴

大に對して、彼が採用しようとした土地丈量策を取りあげ検討したいと思う。

彼は土地丈量を基礎に、里甲の均平化を主唱したのであるが、これは將に江南各地で當時問題になり始めていた均田均役法と軌を一にするものであった。萬曆中期、河南の一部地域では呂坤の丈地均田になつた里甲均平化が實行されていたと見なされ、その實行者の一人が、これも有名な楊東明であつた。

こうして華北地域でも各地で各様の内容を持った均田均役法が實施されて行き、明末の動亂期には一時、その動きは杜絶えるが、清初康熙年間に、この法は華北の相當廣範圍に普及したと見なされる。

釋 對 揚

伊藤道治

『詩經』、特に西周金文には「對揚王休」という語が頻繁に使用される。鄭玄が、「王の策命に答えるの時、王の徳の美なるを稱揚す」と解してより、現在でも多くの研究者がその説に従う。この語は、西周中期の「冊命賜與形式」とよばれる殆んど金文に使用されるため、一般には、當時の慣用語であるとされ、當時の君臣關係においてどのような意味をもち、政治上どのような働きをしたかについては、却つて等閑視されて來た。本論ではこの點について考察するが、その結論を左にあげる。

(1)對揚の語義は、單に王の策命に答えて、王の徳を稱揚するとい